

中華人民共和国駐日本国大使館

Embassy Of The People's Republic Of China In Japan

CHINA-VI

<http://www.china-embassy.or.jp/jpn/> チャイ・ナビ

2021年増刊号

共に想像の翼広がる未来へ

Panda杯2021表彰式オンライン開催



昨年11月23日、Panda杯全日本青年作文コンクール2021オンライン表彰式が駐日本中国大使館と中国外文局アジア太平洋広報センター、公益財団法人日本科学協会の共同主催により北京で行われた。孔鉉佑駐日本大使は東京からオンライン表彰式に出席し、祝辞を述べた。また、中国外文局の杜占元局長、日本科学協会の顧文君常務理事、森ビル株式会社の星屋秀幸顧問、東日本国際大学の西園寺一晃客員教授、中国日本語教学研究会の徐一平名誉会長らのゲストや協賛団体の代表者、日本人受賞者約100人がオンライン交流を行った。

コロナ下で寄せられた400作品

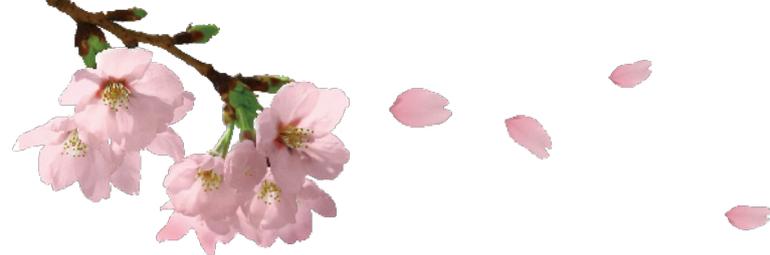
2014年から始まったPanda杯は、中日間の青少年交流を促進し、日本の若者たちにより全面的かつ客観的、そして

理性的に中国を知ってもらうことを趣旨としている。同コンクールの開催は今回で8回目となり、これまでに日本全国から寄せられた応募総数は3500点近くに上る。

昨年のPanda杯はおととしに引き続き、「@Japan わたしと中国」をテーマとして、16歳～35歳の日本人を対象に日本語作文の募集を行った。新型コロナの影響でさまざまな困難がある中、400点もの応募作品が寄せられた。厳正な審査の結果、優秀賞10名、入選10名、佳作35名、ならびに

団体賞4校が選ばれた。そのうち団体賞は沖縄県立八重山商工高等学校、創価高等学校、立命館宇治高等学校、神田女学園高等学校が受賞した。

孔大使は祝辞の中で、「中日は一衣帯水の隣国であり、国民感情の改善は両国が直面している共通課題です。両国の若者が先人の素晴らしい伝統を積極的に受け継ぎ、中日の友好交流とさまざまな分野での互惠協力に奮って参加し、中日関係の発展により多くの源泉からの活力と内なる原動力をもたらすことを期待しています。2022年北京冬季オリンピックは、夏冬両季五輪の開催都市となる北京で幕を開けます。冬季五輪の選手たちが競技場で最高のパフォーマンスを発揮し、素晴らしい成績を収め、両国の選手が大会を通じてたくさんの友好の物語をつづることを願います」と強調した。



杜局長は祝辞の中で、このたびのPanda杯で見られた中日の若者が誠実に交流し、互いに引かれ合う物語は、友好と協力の強化を求める両国民の真実の声を反映したものと指摘した。また杜局長は、「両国民の友好の未来は若い世代にかかっています。19年、習近平国家主席がPanda杯の受賞者の一人に送った返信は、中日の若者が今後歩むべき方向性を指し示しました。

両国の若者が文化の学び合いを推し進め、相互理解を深めて、両国の未来のために友情の種をまき続け、中日友好事業の発展に若い力をより一層ささげることが願っています」と語った。

日本財団の尾形武寿理事長はビデオメッセージを寄せ、他国との交流では誤解を招く現象が時々起こるが、そのような時こそ等身大の日本を知ること、また等身大の今の中国を知ることが求められ、相互交流や相手国を訪問することが重要であると述べた。加えて尾形理事長は、中国は日本の重要なパートナーであり、政治や経済、宗教といったありとあらゆる違いを乗り越え、中日両国の民間交流をこれからも後押ししていくと語った。

日本科学協会の高橋正征会長もビデオメッセージを通じ、「中国を訪問すると、中国の若者の皆さんから、いろいろな質問や考えを聞かれます。意見交換がより充実したものとなるように、ご自身の興味や関心のあることについて、ぜひ事前に調べて考えを整理しておかれることをお勧めします」とアドバイスを送った。



未来へと歩み続ける中日の若者

受賞作品はこれまでの多角的な視点を受け継ぎながら、中日の今後の協力について自由闊達な提言を行うものが多く見られた。

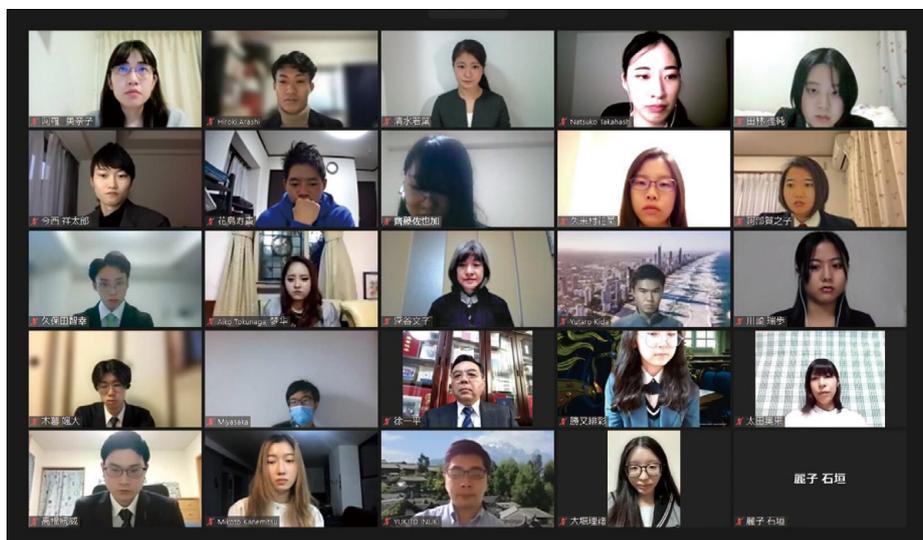
真崎雄大さんは優秀賞の受賞作品である『科学技術の国』で、研修で上海を訪れた際、中国の科学技術の大きな変化を切に感じて、中国と縁を結び、グローバルな課題の解決のために中国の友人と共に貢献することを志したエピソードをつづった。

審査員の星屋氏は講評の中で、「日本の若者が自分と向き合い、素直に表現し、独特な観点から中国と関わっていることに感銘を受けました。私は両国の未来を楽観視しています。なぜなら、日中の将来を担う若者が民間交流を通じ、鋭い感性で相互理解を深め合い、信頼を確かなものにしていくからです」と語った。

受賞者代表の森楽歩さんは、「交流を始めた当時の私は、中国についてほとんど何も知らず、メディアの偏った報道の影響で正直あまり良いイメージを持っていませんでした。2

度中国を訪れましたが、モバイル決済やシェアリング自転車など当時日本ではまだまだ普及が進んでいなかったものに刺激を受け、国際交流で偏見や先入観がもたらす危険性と、自分自身で正しい情報を選び取る重要性を痛感しました。こうした経験から、私も中国語を身に付け、中国についてももっともっと知りたいと思うようになり、日々勉強に励んでいます。私はこれからも日中の青年交流に貢献できるよう、そして日本と中国の懸け橋になれるよう努めていきたいと思えます」と感想を述べた。

表彰式では両国の若者によるビデオ



ビデオレターによる中日の若者の語り

新型コロナの影響により、表彰式は2年連続でオンライン形式となった。そのような中、中日の若者の交流をより実りあるものとするために、昨年は主催者の提案で両国の若者がビデオレターを作成し、それぞれの中日交流体験を語った。



清水若葉さん

中国人の日本に対するイメージを聞いてみたいです。そこに中日友好の糸口が見つけれられるのではないかと考えています。ダイ(傣)族の竹の家に泊まり、チベット族のバター茶を味わい、チワン(壮)族の掛け合いの歌を聞くなど、多民族国家である中国ならではの文化に触れたいです。



稲垣信さん

十数年前に上海を訪れ、現地で多くの友人ができました。中国のイメージは規模が大きいという言葉に尽きます。今の中国でトレンドだという漢服を着て、ぜひ写真を撮りたいと思っています。



今西祥太郎さん

作家である劉慈欣の作品『三体』など、中国のSF小説に興味を持ち始めています。北京冬季オリンピックにも注目していて、中国のドローンによる開会式の演出に非常に期待しています。



宗詩涵さん

日本には「幽静(わびさび)のイメージを持っています。わびさびは静かで自然な美しさを表しています。どうか皆さん、私の故郷である江西省九江市に来て、廬山で雲霧茶を飲み、廬山茶餅を味わってみてください。きっと中国ならではのわびさびが体験できると思います。



瑟瑟さん

日本の若者が漢服に強い関心を抱いていることを知りました。漢服で一番特徴的なのは、半袖で胸元がゆったりとした唐代のものだと思います。その特徴は敦煌の壁画に描かれた天女にも、古代中国の人々が抱いたロマンチックなイメージとともに表現されています。新型コロナが収束した後、漢服や和服が好きな中日の若者が一堂に集まり、一緒に文化交流イベントを開きたいです。



吳嘯風さん

中国の若者と比較した場合、日本の若者は全体的により個性を持っていると思います。新型コロナの収束後、徐々に中日の観光交流が元通りになることを願っています。それは両国の若者が相互理解を進める上でプラスになりますから。

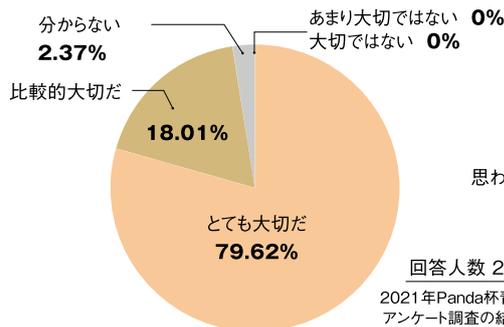


QRコードをスキャンするとビデオレターが見られます

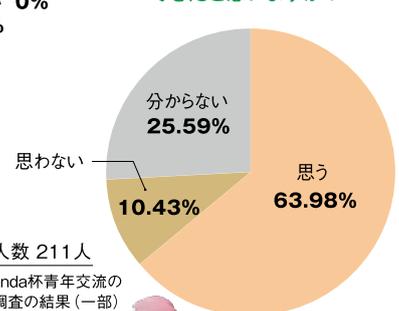
オレターが放映されるとともに、2021年度Panda杯青年交流について実施されたアンケートの調査結果が発表された。

表彰式の司会を務めた中国外文局アジア太平洋広報センターの陳文戈主任は、受賞者たちが待ち望む中国訪問について、新型コロナがしっかりと抑制された後、21年の受賞者の訪中は20年、22年の受賞者たちと共に22年下半年に行われる予定だと語った。

日本人にとって中日関係は大切だと思いますか？



2000年以上の交流の中で、中日両国は共通の東方文化と価値観を形成してきたと思いますか？





調査結果まとめ

Panda杯青年交流アンケートの調査結果について、アジア太平洋広報センターの王衆一総編集長は次のように詳しく解説した。

2019年6月、習近平国家主席がPanda杯の受賞者である中島大地さんに返信をした後、より多くの日本の若者が本コンクールに関心を抱き、参加しました。中日の若者の交流を一層促し、各種世論調査に見られる日本人の対中好感度の低さについて新たな視点から考える手掛かりとなるよう、20年よりPanda杯参加者と中日交流を行っている日本の若者を対象として、アンケート調査を行っています。

昨年5月から9月にわたり、2021年度Panda杯青年交流アンケートはつつがなく実施され、最終的に211名の有効回答が集まりました。そのうち152名は学生で、59名は社会人でした。

データが示す回答者の若者の意識傾向としては、次の4点が挙げられます。

第一に、日本の若者は主に日本のメディアやSNSで中国に関する情報を得ており、日本のメディアによる中国報道は一面的だと感じています。同時に、それらの回答者は客観的かつ全面的に真実の中国を理解する上で、中国メディアが大きな助けとなっていると考えています。

71.09%の回答者はテレビやラジオに代表される日本のメディアが中国に関する日頃の情報源であり、50.71%はフェイスブックやツイッターなどSNSを通じて中国情報を得ていて、これらの数字は20年からほぼ横ばいでした。

また、74.41%の回答者は、「日本の報道から受ける中国のイメージが自身のイメージより悪い」と答え、56.87%が日本のメディアは中日関係促進や相互理解に「貢献していない」もしくは「マイナス効果になっている」と考えています。この2項目は20年に比べて約4ポイント増加しました。

そして、56.40%が訪日日本人観光客減少の原因として、「メディアの報道を見て、中国の大気汚染や食品事情が心配だから」と答えています。

特筆すべきは、今回新たに設けた「中国のメディアはあなたが全

面的かつ客観的にリアルな中国を知ることには貢献していますか？」との問いに対し、48.82%が「貢献している」「多少貢献している」を選んだことです。

第二に、20年と比べて、日本の若者は現在の中日関係への憂慮を深めています。中日関係と中日協力の重要性もより強く意識しています。多くの若者は両国に相通じる東方文化の価値観を十分に認め、東方の知恵がグローバルな課題の解決上、重要な意義を持つと考えています。

72.51%の回答者は現在の中日関係を「あまり良くない」または「良くない」とし、この値は20年より14.35ポイント増加しました。97.63%が日本にとって中日関係は「とても大切だ」もしくは「比較的大切だ」と考えており、92.89%が「アジアと世界の平和と繁栄の実現のため、中日両国はより緊密な協力関係を構築すべきだと思う」と回答しています。

また、63.98%が「2000年以上の交流の中で、中日両国は共通の東方文化と価値観を形成してきたと思う」と答え、そのうち85.93%は「こうした東方文化や価値観は、新型コロナウイルス感染症の抑制、気候変動、貧富の格差の解消、共同発展といった今日の世界の諸問題に対して、重要な意義があると思う」としました。

第三に、多くの日本の若者が中国の若者と交流する意欲を持ち、留学や修学旅行での相互訪問、文化交流の機会が増えることで、両国の青少年交流が深まることを望んでいます。またその際、メディアが積極的な役割を果たすことを期待しています。

93.33%の回答者が「若者世代の中国人の友達が欲しいと思う」と答えました。また、84.36%は若者世代の中国人と「学業、就職、恋愛、結婚などライフスタイルについて話したい」と回答しています。さらに、半数以上の人々が新型コロナの収束後、中日両国の官民は青少年の交流のために「留学派遣、修学旅行などの相互訪問、芸術や音楽、スポーツなど文化交流の場を増やすべき」としました。

第四に、Panda杯への参加を通じ、日本の若者は中国への認識を深めると同時に、相互理解の重要性を認識し、中国を知り、中国の人々に接したいという願いを強めています。

72.51%の回答者はPanda杯参加のきっかけについて、「もっと中国を理解したいから」と答えました。過去に受賞者に聞いた訪中交流の満足度は100%で、その収穫としては「中国語学習への興味が強くなった」が最も多く、「中国と中国人への理解が深まった」がそれに続きました。さらに、93.33%が訪中研修参加を通じ、「中国や中国人への印象が良くなった」とし、95.73%はPanda杯参加で「もっと中国を理解したい」「もっと中国人と交流したい」と思うようになりました。

20年に比べ、昨年は有効回答が5割近くまで増えました。このことは新型コロナで両国の人的往来が制限される中、日本の若者が中国を理解し、中日交流に参加したいという切なる願いに変化がないことを十分に反映しています。



注：作者の意向により、本人の顔写真は掲載しません。

太田 実来(おた みく)

優秀賞

1987年生まれ。祖父母が中国で終戦を迎える。終戦後、祖父は八路軍に参加。祖母は勤労奉仕隊で残留。祖母の手記『海を渡っていった少女』の作成を手伝ったことがきっかけで、日中友好に携わりたいと思うようになった。

私の中の目に見えない中国

私が母方の実家に泊まりに行くと、みんなで手作りの水餃子を作って食べるのが恒例だった。

祖父はよく、「中国ではこうやってお茶を淹れるんだ」と言って、時間をかけてお茶を淹れてくれた。祖母は家事をしながら、いつも中国語の練習をしていた。子供だった私は水餃子の美味しさに夢中で、二人が中国で終戦を迎え結婚したことくらいしかその時はわからなかった。

そんな祖父が四年前に亡くなった。体調を崩し引きこもりがちだった私だったが「今しか会えない」という思いで、祖父の病院まで飛んでいった。祖父は、「実来は実来がやりたいようにやればいい」と言って力強く手を握ってくれた。あの時の祖父の想いが、今私の手を動かしている。それが、祖父の最後の言葉になった。

祖父が亡くなった後、祖母は九十歳で『海を渡っていった少女』と題して戦争体験記を本として残した。私はその本の作成を手伝った。そして、子供の頃に祖母が中国語を練習していたのは、中国に会いたい人がいて中国に行く為だった事を知った。それと同時に祖母の壮絶な体験と日中友好に対する強い想いを知ることもなった。祖母の体験が鮮明に脳裏に浮かんで胸が痛み文章を打つたびに何度も手が止まった。十六歳で勤労奉仕隊の一員として当時「満州」と呼ばれた中国の東北地方に渡った祖母は六か月後に終戦を迎え、逃げながらなんとか命を繋いだ。炭鉱で中国人の子守として働きながらかけがえのない出逢いを経験し、助けられ守られながら日々を生き延びた。私は、直接祖母の口から語られることのなかった人生を全て見たような気がした。「助け合わなくてはいけない、戦争は絶対にダメだ」と会いに行くたびに何度も言っていた祖母の言葉の重みをようやく感じる事ができた。

祖父は十九歳の時に兵隊で「満州」に渡り、終戦後は中国人と共に仕事をしながら生き延びた。その後、祖父と祖母は出会って結婚し日本へ帰国することができた。その十数年間に二人が体験したことは言葉にできないほどの悲劇だったかもしれない。けれども二人はいつも「日中友好」という言葉を口にしてきた。

2007年、祖父と母が中国に招待されて行ったことは記憶していた。その時に青春時代を共にした仲間のお墓に中国人と共に松の木を植樹してきたことを最近になって知った。今、祖父の口から語られることはないが、祖父が母に伝えた当時の事を私は母の口から聞くことになった。祖父は中国空軍老航校創設に参加し、戦闘機の計測器を作る技術を中国人に教えた。言葉の通じない日本人と中国人が、共に助け合い苦難を乗り越え、兄弟のような消えることのない深い友情で結ばれていった。その時に祖父が残した感想文には「私の青春時代が中国空軍創設のために役立ったことを一生の誇りとして、この感激を孫の代まで伝えていこうと強く、強く思いました」と記されていた。言葉で伝えることができなかった祖父の想いを私は初めて知った。戦争という悲惨な時代に、かつては憎しみ合った日本人と中国人が共に助け合い友情を築き上げた祖父の人生は、胸をはった後悔のないものだった事だろう。

今、新型コロナの流行で祖父のお墓に行くことはできないが、行ける時がきたらそのお墓に刻まれている「友好」の二文字に手を合わせて私はこう伝えたい。

「じいちゃん、私は『実来がやりたいようにやればいい』という答えをまだ見つけられないけど、じいちゃんが植えた松の木に託した友好の想いのように、目に見えないものを大切に生きていきたいと思うよ。この気持ちが今の私の目の前を少し明るくしてくれているよ」



2003年生まれ。中学二年生時に、友好交流事業で中国人留学生のホームステイを受け入れ、自身も二度訪中したことをきっかけに中国に興味を持つ。自分も友人らと中国語で交流したいと思うようになり、現在は北九州市立大学の外国語学部中国学科で中国語を学んでいる。趣味はパンダグッズを集めること。



森 楽歩(もり らくほ)

優秀賞

また逢う日まで

2020年1月のある朝、テレビから流れるニュースに、登校準備をしていた私の手が止まった。中国の武漢市で新型コロナウイルスが感染拡大しているというものだった。武漢市に住む友人の顔が次々と頭に浮かんできた。すぐにSNSで友人に状況を聞いたところ「大丈夫だよ」と返事が来た。私を安心させるための言葉だったかもしれないが、ニュースを見て以来ずっと心に立っていたさざ波が少し収まった。

日が経つにつれ、友人から武漢市の状況が緊迫していると知らせがあり、私も何か支援をしたいと思った。だが、物資を届けようにもロックダウンされた武漢市への郵送は難しかった。そんな状況下で、私に何ができるだろうか。考えた結果、高校の友人にも声をかけて「武漢! 加油!!」の応援メッセージをSNSで武漢市の友人たちに届けた。すると、彼女たちは「元気が出た、ありがとう」と喜んでくれた。不安で沈んでいた彼女たちの心が少しは明るくなったようで嬉しくなったが、それと同時にそんなことしかできない自分の無力さも感じた。

私は、この春から大学で中国語を専攻している。中国語を身に付け、日本と中国をつなぐ仕事がしたいという夢のためだ。きっかけは5年前、私が中学2年生の頃に、武漢市から中国人留学生のホームステイを受け入れたことだ。日本語を学ぶ5人の学生が、私たちの中学校で1か月間を一緒に過ごした。同年代の彼女たちが、母国語ではない日本語を使い意思疎通に奮闘している姿に私は憧れた。ホームステイでの出会いから私は2度、武漢市を訪れた。その当時話すことができた中国語は簡単な定型文程度だったが、友人たちやそのご家族は私を歓迎し、もてなしてくれた。その時、私は初めて、将来中国語を身に付け、彼女たちと中国語で話したいと自覚したのだと思う。

今、念願の中国語を学べる環境に身を置くことができていることが何より嬉しく、刺激的で充実した日々を送っている。大学の授業では中国に関する国際ニュースをディスカッションする時間がある。ディスカッションを通して、クラスメイトや先生の

考え、価値観を知ることができる。自分にはない新たな視点は勉強になり、自分の未熟さを痛感することもある。

だが、もし中学2年生での交流がなければ、今のように中国語を学んでいただろうか。中国にネガティブなイメージを抱く日本人がいることは否めない。観光地で騒ぐ団体観光客や違法なコピー商品のような日本メディアの偏向報道だけが、中国のイメージの形成要素となっているからだろう。もし、それらの情報だけを鵜呑みにしていたら、私も同じように思っていたかもしれない。だが、私が出会った中国人は皆、知的で勤勉で尊敬できる憧れの存在だった。自分の経験から、異文化交流においては先入観を持たないことが最重要だと考える。様々な情報を取捨選択し、自分から積極的に集めていくことが大切だ。それを大学での4年間でしっかり学びたい。今の私にできることは、たくさん勉強してインプットを増やすことだ。近い将来、中国に行けるようになった暁には、思い切りアウトプットをしたい。それまでに多様な価値観に触れ、多角的な視点を身に付けておくという目標ができた。

昨今のパンデミックの影響で、武漢の友人と直接会うことはできないが、お互いの課題をアドバイスし合ったり、リモートで近況を話したりといった交流は続いている。私の所属するガールスカウトで、中高生とコロナ下での生活について考えるオンラインイベントを実施した際に、武漢市の友人にロックダウン中の生活についてインタビューした動画を作ったりもした。だが、私に中国語を学ぶきっかけをくれた彼女たちと直接会えないことに虚無感を感じることもある。

黄鹤楼送孟浩然之广陵

李白

故人西辞黄鹤楼 烟花三月下扬州

孤帆远影碧空尽 惟见长江天际流

中国と出会って、私の人生は変わった。自分の恵まれた環境に感謝し、これからも学び続ける。



今西 祥太郎(いまにし しょうたろう)

優秀賞

慶應義塾大学大学院中国文学専攻修了。第2外国語の中国語を勉強するため観始めた中国映画に興味を持ち、専門で研究するようになる。在学中は上海の華東師範大学に留学し、語学を学ぶとともに大都市の目まぐるしい変化に魅了される。現在は中国で働くことを目標に、日々の仕事の傍ら中国語学習を続けている。

対岸の父

大きな川の写真だった。

向こう岸にはがらんとした土地が広がり、ぼつぼつと建物が伸びている。父が突然、書棚の奥底から埃と共に一枚の写真を引っ張り出してきて、得意げに僕に見せたのだ。

「外灘」

そう言う父は、まるで少年が自慢のレアカードを友人に見せる時のように僕の反応を伺っていた。写真の外灘は僕の知る姿ではなかった。かなり前に撮られたのだろう。「何もないね」と僕は言った。父は満足げだった。それが少しだけ癪に触ったが、でもその「外灘」は本当に何もなかった。

外灘といえば僕の上海留学中の庭だった。入学手続きが終わって最初に繰り出したのは東方明珠だ。友人と共に恐る恐る(エレベーターで)てっぺんに登った。床ごと回るレストランでバイキングを堪能したが、その味よりガラス張りの外の摩天楼が鮮烈に印象に残っている。「これが魔都か」と通ぶって、これから始まる留学生活に思いを馳せたのが懐かしい。

授業のない休日も、暇を見つけては外灘へ足を伸ばした。今もスマホには、そこで撮った写真たちがストレージを圧迫している。何気なく見返すと、騒がしくも暖かいネオンの光に誘われそうになる。こういう時、コロナが本当に憎いと思う。

留学生活の始まりが外灘なら、終わりも外灘だった。僕は留学の帰路にあえて航路を選んだ。蘇州号と呼ばれたそれは、外灘から海に出て二日を費やし大阪を目指す。夢のようだった。外灘と日本は繋がっていたのだ。

帰国してからの僕は正直浮かれていた。誰よりも中国を知っているような、そんな気分浸っていた。だから、父が「外灘」の写真を見せた時、正直悔しくもあった。父は、僕の知らない中国をたくさん知っていた。

80年代後半、大学卒業後に中国語を習い始めた父は、旅行に困らないくらいの言葉を習得すると、中国を周遊するようになった。父を教えた中国語教師は、日本で指導していた上海

人だった。二人は授業以外でも交流があり、父は自分の結婚式にも先生を呼んだ。

上海に留学中、僕はその先生のもとを訪れる機会があった。先生は、今では上海の大学で教鞭を執る教授だった。渡航の直前、父はその教授の連絡先を僕に教え、「会ってこい」と言った。留生活が始まって一ヶ月ほど経った頃、教授と連絡を取ることに成功した。僕は彼の大学関係者が集う食事会に招待された。

教授は非常に温和な方だった。あろうことか大学の構内に迷って少し遅れてしまい、汗を滲ませながら謝る僕を、教授は笑顔で隣に座らせた。しばらくすると自己紹介の時間になった。円卓を回すように代わる代わる教師や学生が前に出て自己紹介をし、時折僕の隣に座る教授に向かって、笑いかけたり、しみじみしたりしていた。最後に教授は僕にも自己紹介するよう促した。乾いたはずの汗が再び僕のTシャツの背中を伝った。僕は持ちうる中国語を使って、日本人であること、留学していること、ここにいるきっかけには父の存在があることなどを話した。僕のスマホには、当時教授と撮った写真も残っている。父にも見せたはずだ。その写真を見て、彼は何を感じただろう。

父が僕に見せた「外灘」の写真は、今とは似ても似つかなかった。中国の変化は目まぐるしい。僕と父は時を超えて同じ「外灘」の地を踏んだはずだが、お互い「外灘」と聞いて思い浮かべるものはきっと別の姿で、それらはまさに黄浦江を挟んで向かい合う陸地のように隔たっているのだ。

僕もいつか子供が生まれたら、その子に中国語を教えるかもしれない。彼は夢中になって中国語を学び、中国を知ろうとするだろう。なにせ父と僕の二代を魅了したのだ。その魅力は今後も衰えることはない。未来の中国はきっとまた今とは違う顔を見せているだろう。その時、僕はスマホのストレージで窮屈そうにしている外灘の写真を引っ張り出してこよう。そして、自分の子にそっと見せてあげるのだ。多分、得意げに。



1998年生まれ。新潟経営大学経営情報学部に在学中。第二外国語として中国語を選択し、中国に留学経験のある教員に師事する。中国語学習を通じて、中国の文化や歴史、トレンドに興味を持ち、今では学んだ中国語を駆使してWeibo（微博）をチェックすることが日課。



高橋 統威 (たかはし とうい)

優秀賞

私と漢詩

私は現在、大学で中国語を学んでいる。中国語検定やHSKに積極的に取り組み、力を着々と付けていると感じている。いったいこの活力はどこから来ているのだろうと思いついてみると、忘れかけていた一つのある「夢」を思い出した。それは中学生の時だった。

日本では、中等教育から国語や古典といった科目の中で古文漢文の授業があるなど、中国文化や思想また当時の日本がそれらに色濃く影響を受けていたことに触れる機会がある。その中でも、私は漢詩の授業が好きだった。漢字が整然と並んだ様子は、まるで長安城の美しい暮盤目を想起させ、日本語で読み下したときの怪しげな響きが二胡の奏でる音楽を連想させ、私を中国という茫漠へと誘うからだ。

この漢詩を読むときに感じる陶酔は私を夢中にさせ、李白、杜甫といった代表的な詩人はもちろんのこと、詩集や文豪の作品など様々に読み漁った。学生生活で悩んだり辛いことがあったりしても、広大な情景と美しい物語の大海原にひとたび飛び込めば、それらがいかにも取るに足らないことであるかを私に実感させ、前を向く勇気を与えてくれる。

私にとって漢詩とは、正に心の拠り所だった。ただ、押韻、平仄といった音楽的な技巧や中国の山々の固有名詞など、日本で生まれ育った身では手の届かない奥深い漢詩の世界は、私に漢詩を味わい切れていないという印象を抱かせると同時に、漢詩の情緒息づく雄大な中国への憧憬を抱くようになっていった。

しかし当時中学生だった私は、高校受験を控えていたこともあり、中国へ行こうとは露骨も思わず、憧れは心の中に押し止めるほかなかった。そして高校生になり部活動や大学受験の勉強に忙殺される中で、いつしか中国への想いは次第に薄れていってしまった。

そんなある日、心の拠り所を手放してしまったからだろ

う。心労がたたり、浪人生時代に大病を患ってしまった。大きな手術や入院、リハビリ、薬の副作用の適応など大変な時期を過ごした。命に別状はなかったものの、発声がしにくくなるという後遺症が喉に残り、コミュニケーションにおける困難が一生付き纏うことになってしまった。自分の境遇を受け入れることができず、漫然と過ごす日々が続いていた。

自宅での療養生活が半年ほど経った時、時間を持て余し見るともなくテレビを見ているときに、映画が放送されていたのだが、あるシーンに目を奪われた。私の大好きな漢詩が引用されていたのである。

生死去来 棚頭傀儡 一線断時 落落磊磊

「生と死が去ってまた来る、棚から吊った操り人形が、その糸を切るやいなや、ガラガラと崩れ落ちるように」

これは、日本の室町時代の能楽の大成者である世阿弥の書『花鏡』の一節である。能の心構えを示したものが、人間の死生観を表した言葉としても捉えられている。

人は「死」の存在を知覚した時、ともすれば厭世的になり人生は瓦解してしまうが、それを乗り越えることこそが、生きることの心構えなのだ。世阿弥は示しているように思う。人生に悲観していた私は、この言葉によって自分の境遇を受け入れ、前を向くことの大切さを知ることができた。また漢詩に救われた。病氣と戦うのでも恨むのではなく、受け入れ共に歩いていく覚悟ができたとき、不思議と涙が溢れてきた。

私は今、「中国に行きたい」という思いを新たにしている。私は病により声を満足に出せなくなってしまい、大きな声で詩を吟じることもできなくなってしまった。しかし、鑑賞することや書くことによって漢文の世界と繋がっていることはできる。中国へ行った際には、是非とも漢字で詩を書き、先人たちの轍に続いていきたい。



南 愛莉 (みなみ あいり)

優秀賞

青山学院大学英米文学科在学中。高校生の時に、中国から来たクラスメイトと仲良くなったことがきっかけで中国語の魅力に引き込まれ、大学入学後に第二外国語として中国語を選択し学習を開始。内閣府の日本・中国青年親善交流事業や日中学生会議への参加を経て、現在は中国大学院進学を目指している。

民間外交官

どうやら人間、衝撃を受けると本当に時間が止まったように感じてしまうみたいだ。

2019年の夏、私はカナダで中国の友人と山登りをしていた。中国語で話しながら山頂まで行き、絶景を楽しんでいたその時だった。後ろに座っていた同世代の日本人女性二人が私達のバッグを足で蹴り、日本語でこう言った。

「邪魔なんだよ中国人、国に帰れよ」

きっと二人は、私たちがどちらも中国人で日本語は分からないと思ったのだろう。そんなことを考えていると中国の友人が私に尋ねた。

「小爱、她们在说什么？」

言えない、言えるわけがない、でも何か言わなきゃ。自分の体感で10秒ほど時間が止まった後、やっと言葉が出てきた。

「包下面有虫！」

滞在先に戻った後色々考えてみた。「何言ってるんですか？」とか「その発言って差別ですよね？」とか...日本語で言い返せば良かったのだろうか？このようなことが二度と起こらないようにするにはどうすればいいのだろうか？でもただの大学生にできることは無いだろうし...そこでもう考えるのを止めてしまった。私には何もできないからもう仕方ないのだ、そう勝手に結論づけた。

それから一年が経った去年の秋、SNSである投稿を見つけた。「日中青年相互の友好と理解促進目指す参加者を募集します」。一年前のあの場面が浮かんだ。URLを押してみると、内閣府の日中青年親善交流事業である「日中代表ユースフォーラム」の案内が出てきた。事業の交流テーマは「ウィズコロナ時代に求められる日中青年の役割」、私が一年前に悩んでいたことの答えが見つかるかもしれないと思すぐ応募した。だが二次審査の面接であることが起きた。

「事業終了後、この経験をいかしどのように社会に貢献していきたいですか？」

と質問されたのだ。学生に何ができるのか、貢献できるのか

についてその時もまだ意見を持てていなかった私の頭は真っ白になった。その時何と答えたのかは覚えていない、きっとパニックになりながら何か言ったのだろう。しかし数日後に選考通過の連絡が来た、事業に参加できるようになったのだ。

私のグループのディスカッションテーマは「科学技術」。中国側の発表では、街中をパトロールする無人のロボットなど、日本では馴染みのないものが紹介された。もし私の街にこのロボットが導入されたら、皆受け入れるのだろうか？そう考えていた時、ある日本人学生が中国の学生にこう質問した。「多くの日本人はこのロボットを見ると、誰かに監視されている気分になってしまうと思う、皆さんはどう考えますか？」まさに私が思っていたことだ。すると中国側から驚くべき答えが返ってきた。「私達は、人間と技術が協力してより暮らしやすい社会をつくることに目を向けています」。そんな考え方があったのか、新しい価値観に触れた。そしてその時気付いた、きっと日本人と中国人の心の距離を広げてしまうのは、このような考え方や文化の違いなのではないか？それなら、中国の人たちが持っている価値観や文化を日本人に広めていけばいいのだ、これなら私にもできると思った。

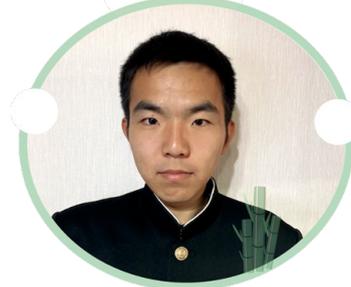
事業終了後の今年3月から、私は東京都日中友好協会でインターンを始めた。協会SNSの管理を任せてもらい、中国の人々が共有している価値観や文化はもちろん、中国トレンドなども日本人に知ってもらうために情報を発信している。この活動を通して新たに気付いたことがある。日中で親しまれているSNSは異なるため共有できる情報も異なり、それが民間の心の距離を生む原因にもなり得るということだ。だからこそ、両国のSNSを繋ぐ役割を今果たせていることに誇りを持っている。

あの山頂での出来事からずっと考えてきたが答えが見つからず、さらに去年の秋にも答えられなかった「どのように社会に貢献していきたいですか？」という質問、今なら自信を持って答えることができる。

「民間外交官として日中両国を繋ぐことで社会に貢献したいです」



2003年生まれ。佐賀県立佐賀西高等学校在学中。中国での研修への参加を通して、中国の文化や科学技術に感銘を受ける。工学に強い関心があり、特に3次元造形の研究に取り組みたいと考えている。将来は他国と協力しながら、持続可能な開発目標達成に貢献できるようなものづくりに携わっていききたい。



真崎 雄大(まさき ゆうだい)

優秀賞

科学技術の国

中国に対して抱いているイメージは人それぞれ違うと思うが、私の中での揺るがないイメージは、中国が「科学技術の国」だということだ。

私は、幼少のころから科学に強い関心を持っていて、将来は研究の道に進みたいと考えていた。小学生時代、社会科の教員に、日本が戦後の苦しい状況から科学技術の力によって復興、発展し、今の日本ができたことを教わった時は、日本の科学技術のすばらしさを誇らしく、また、自分もそうした科学技術で日本をけん引できるような人になりたいと思ったものだ。それから、中学校に進学したわけだが、この中学生で参加した中国での研修が私にとって一つの転機となる。

私の通っていた中学校は、中国の中学校と交流があり、毎年学校の代表者を募り、中国への研修を行っていた。一度も海外に行った経験のなかった私は、興味本位で応募をし、有り難いことに交流団の一員に加えていただくことになった。向かった都市は、中国の中でもひと際発展した町である「上海」だった。空港を飛び立ち、いざ上海につくと、そのスケールの大きさに圧倒されたのを今でも覚えている。立ち並ぶ高層ビルは、空を小さくし、美しい光が飛び交う中心部の夜景は、写真で想像していたものをはるかに超えていた。なにより、当時、世界でも珍しかった上海リニアへの搭乗体験は、中国の技術の高さを私に深く印象付けるものとなった。

そして、迎えた上海曹楊中学校訪問。違う国の中学生と交流するのは初めてで、緊張していたが、彼らは私たちをととても温かく迎えてくれた。そこで、私はある男子生徒と出会った。自己紹介で彼は、将来の夢は科学者だと言った。初めて出会った異国の同志であり、彼は自分の興味のあることや、面白い知識をたくさん紹介してくれた。そして、何よりも私を驚かせたのは、彼が学校の近隣の汚染さ

れた河川を浄化するための研究をしているということだった。具体的には、河川の水を一部学校の敷地に引き、学校と協力しながら制作した浄化槽で汚れを取り除いた後に、また川へ戻すというものだ。彼は自ら問題発見、課題設定をし、その解決に向けてのアイデアをだして、そしてそれを実行していた。彼はすでに私のはるか先を行く科学者だと思った。その他にも、外交官になりたいと言っていた生徒は、私に流ちょうな日本語で話をしてくれたし、中国の大気汚染について考える授業に参加させてもらった時には、彼らはすべて英語での活発なディスカッションを行っていた。この研修で、私は意識の違いを強く感じ、自分も変わらなければいけないと思うようになった。

世界の科学技術や研究力に関する情報を調べてみると、その上位を占めるのはやはり中国だ。人口が多いのだから、研究論文の数も多く、実績も多いのは当然だと考える人がいるのも理解できるが、私は研修での経験を通して、中国の実績は、学生たちの問題意識や学ぶことへの意識の高さによって生まれているものだと思えてならない。

高校に進学してから、私はそれまで以上に熱心に学習に取り組むようになった。新型コロナウイルスの影響もあって、学校に通うのが困難な時期もあったが、その時間は、より専門的な知識を身に付けるための有意義な時間にもなった。また、大学の研究プログラムに応募し、約15か月間研究室に配属されて研究活動に取り組むなど課外活動にも力を入れるようになった。その変化の要因には、やはり中国の学生たちから受けた刺激と彼らへの対抗心がある。彼らは、ともに科学技術の発展を目指す同志であり、決して負けたくないライバルにもなった。そして、いつか彼らと肩を並べて、自国のみならず世界全体が抱える諸問題に共に立ち向かっていけたらと思う。日本と中国が、互いに競い、高めあえるような関係であってほしいと切に願っている。



田林 佳純 (たばやし かすみ)

優秀賞

1999年生まれ。神戸市外国語大学外国語学部中国学科4年。中学2年生で中国語と出会い、中国人の温かさや歴史・文化に触れる中で、中国語の世界にのめり込む。2019年復旦大学での半年間の留学を経験し、帰国後はスピーチコンテスト等にも参加。漢語橋では日本代表として世界大会に出場。

場所は違えど心はひとつ

私は、中国語と出会い現在に至るまで、世界各国の人と知り合い、数知れない友情が芽生え、貴重な体験・経験をしてきました。中でも印象に残っているのは、私が高校一年次に、中国で開催された「漢語橋」中高生中国語スピーチコンテスト世界大会に、日本代表の1人として参加した時の出来事です。それは、参加者の一人でありオーストラリア代表の同じ歳の男子、カイくんとの出会いです。

スピーチコンテスト参加当時の私は、中国語も英語も思うように話すことができず、各国から来た他の参加者と交流することができずにいました。異国の地で自分の無力さを実感し落ち込んでいた時に、彼は、初対面の私にこう声をかけてくれました。「緊張しなくていいよ！怖がらなくていいよ！僕の友達と一緒に話そう！！」私は最初緊張してしまい、なかなか話すことが出来ませんでした。しかし彼の言葉を胸に勇気を出して話しかけてみたところ、すぐに友達になることができました。毎日、一緒に食事をしたり、各国のHappy Birthday To You、英語や中国語の歌を歌ったり、買い物に行ったりして過ごす仲良しグループになりました。彼のかけてくれた言葉のおかげで、スピーチコンテスト中の約2週間は、中国や中国語の魅力に触れられただけでなく、世界各国の人との出会い、異文化交流を通じた友情に溢れ、学びの多い充実した日々になりました。

2017年2月、彼は来日し、日本代表として大会に参加していた他の日本人の友達と集まり一緒に東京を観光しました。彼はいつも明るく元気で、私たちにたくさんの笑顔や元気を与えてくれました。

「カイくんが癌で亡くなった」

2018年1月、私のもとに届いた訃報。その知らせを聞いてから私は何日間も泣いて過ごしていました。彼が来日した時、私は、受験勉強をはじめたタイミングで、十分な交流時間をとることができず、1日しか一緒に過ごすことができませんでした。その後も、闘病している彼と最期に話す

ことも、生きている間に連絡をすることもできませんでした。今振り返っても後悔することしかできません。

訃報から数日後、Facebook上で、スピーチコンテストに参加していた世界各国の学生たちが彼の死を追悼するために撮影・編集したビデオやメッセージを見ました。私たち日本人参加者も全員で手紙を書き、オーストラリアの彼の家に送りました。

たった2週間、一緒に過ごただけと言われるかもしれませんが、しかし、中国語という言語を通じて巡り合えたこと、また彼と一緒にいた時間は、私の人生や考え方ががらりと変わるくらい素晴らしいものでした。

今でも私は彼と一緒に過ごした日々や時間、彼の溢れる優しさや笑顔、彼が私にくれたアドバイスを忘れることはできません。もし過去に戻ることができたならどれほど喜ばしいでしょうか。私は彼のことを一生忘れません。天国にいる彼もきっと私のことを覚えてくれていると信じています。

今、私は、大学で中国語を専攻し、毎日一生懸命勉強に励み、充実した日々を過ごしています。彼の一言が与えてくれた勇気、世界各国の学生との出会いや芽生えた友情。私はその中国語というつながりを途絶えさせることなく、勉強し続けることこそが彼にできる唯一の恩返しであり、彼も見守っていてくれていると信じています。

私の中国語との出会いは「無料」という言葉から始まりました。私の母校には孔子学院で半年間中国語を無料で学べる機会がありました。私は中国語を学ぶことを通じて外の世界に目を向けることができ、人生の目標を見つけることもできました。中国や中国語との出会いをきっかけに、中国語を通じて大切な友人にも出会うことができました。私は心の底から中国や中国語との「出会い」に感謝しています。

勇気くれたカイくんとは、中国語を学ぶ同志として、いつまでも共に学び続けます。



2017年早稲田大学商学部卒業。2019年にシナリオ・センター通信基礎科修了後、現在は脚本家、シナリオライターとして日本国内や中国の映像作品に携っている。最近の癒しは仕事の合間にパンダの動画を眺めること。



高橋 奈津子(たかはし なつこ)

優秀賞

そこに愛があるから

#愛は観光ではない。

これはコロナ下のSNS上で生まれたハッシュタグだ。

日本人と、別の国に暮らす外国人パートナー。いわゆる「国際カップル」は、現在国境を越えて自由に会うことが難しい状況になっている。再会の目途が立たないことから婚約が白紙になってしまったり、すれ違いの日々が続いて喧嘩になってしまったりと、予想外のトラブルに悩まされるカップルも少なくないと聞く。

そして私も(国を隔てているわけではないものの)、現在似たような状況に置かれている。付き合っているパートナーは浙江省出身の中国人だ。中国にいた頃は高校で教師の仕事をしてきたそうだから、彼のことは仮に先生と呼ぼう。

先生は国内の大学院を卒業し、日本で就職先を探している。よって現在日本にいるわけなのだが、国内でもまだまだ予断を許さない状況で、もう何ヶ月も会えていない日々が続いている。新型コロナウイルスの流行が始まってから、元来心配性の私の悩みは尽きないばかりだ。

この生活はいつまで続くのか。先生は果たして無事に就職できるのか。もしかしたら私だってこの先仕事が減るかもしれない。もう一生、大好きな海外旅行に行けなくなってしまったらどうしよう…。

毎日のように電話を繋いでほうろたえてばかりの私を、先生はいつも「哈哈哈」とマイペースに笑っている。

「それより中国語の勉強は進んでるの？」

「えっと…今日は飯館での注文の仕方を勉強した」

「すごい。もう中国に住めるね」

「それは言い過ぎじゃない…？」

彼に出会うまでは、ほとんど中国には無縁の生活を送って来た。美味しい中華料理もかわいいパンダも大好きだけれど、良い意味でも悪い意味でも中国に対して持っているイメージは「それだけ」。日本に置き換えてみたら、スシとアニメしか知らない外国人みたいなものだ。

そんな中で、私の中国に対するイメージを大きく変えるきっ

かけとなった先生。彼は前述したようにマイペースで、自然を愛し、人を思いやる気持ちがあって、何よりとてもポジティブだ。彼との感覚の違いに気付いたのは、付き合ってからすぐの頃。

とある晩に「明日は雨だから憂鬱だ」とメッセージを送ったら、「僕は空気が綺麗になるから嬉しい」と返事がきた。またとある日に「おろしたての白い服を汚した」と嘆いたら、「いいじゃない。その服は真っ白なキャンパスだよ」と返ってきた。

つくづくどうしてそんな綺麗な考えを持てるのだろうかと不思議だったのだが、話を聞いてみると彼の原体験は生まれ育った浙江省の、美しい水辺の風景にあるらしい。小さい頃は川でよく魚を採った。中学生の頃は自然豊かな山奥で寮生活だった。近所には鶏がいて、毎朝その鳴き声で目を覚ます。ふるさとの景色を話す彼は、いつもどこか生き生きとしている。

中国を訪れたことのない私にとっては、正直まだ彼の話す美しい景色を同じように想像することはできないのだけれど。だからこそ、これまで知ろうとすらしなかったゆえの穿った見方が確かに存在していたな、と感じるのだ。

自由に会うことを許されない国際カップルについて、ネット上では「外国人を選んだのは自己責任」「立場をわきまえろ」などと批判的な意見が寄せられることもあるらしい。

そんな中、インタビューに答えた一人の女性の言葉が印象的だった。

「私は好きな人が偶然外国人だっただけ。直接触れ合ったり、話したりすることに勝るものがないのは、(あなたの)家族も恋人も友人も同じではありませんか」——

今、この状況で複雑な思いを抱える国際カップルの方は数多くいることだろう。皆が一日も早く、笑顔で再会できる日が来ることを願っているけれど…私が祈らなくてもきっと、いつかこの苦難を乗り越えることができると信じている。

そして、私もいつか必ずこの厳しい状況を乗り越えて、美しい心を持つ彼が育った、浙江省の景色を見に行くことができるはずだ。

なぜなら、そこに愛があるのだから。



稲垣 信(いながき しん)

優秀賞

神奈川県鎌倉市出身。大学では社会学を専攻し卒業。大学時代は上海大学・同済大学で短期留学を経験。また、留学を契機に上海杉達学院大学で日本語を学ぶ大学生と交流を深める。その後、神奈川県日中友好協会青年学生部会（チャイ華）に所属。現在、会社員として働きながら、神奈川県日中友好協会青年学生部会長。

百聞不如一見(百聞は一見にしかず)

「百聞不如一見（百聞は一見にしかず）」は、今では私の座右の銘になっている。「百聞は一見にしかず」とは、百回人から聞くよりも、たった1度でも自分の目で見たほうが確かだということである。

私が中国と出会ったのは、大学で中国語を履修したことから始まる。大学1年生の春、「北京オリンピックや上海万博、中国語は英語の次に必要な言語だよ」と先輩から言われ、安易な気持ちで中国語を選んだ。中学・高校から学んできた英語には新鮮味を感じることは無かったが、漢字だけの中国語に親近感が湧き、中国語を身に付けて、中国人の友達を作りたいという気持ちが日に日に高まった。その気持ちは変わらず、2007年大学1年の冬に上海大学へ短期留学に参加するチャンスを得ることができた。この上海留学経験を機に、中国と今でも繋がることのできたのである。

午前是中国語の授業、午後は自由時間という留学スケジュールであった。午後、他の日本人留学生は上海観光に行く中、私は留学前に決意した中国人の友達を作りたいという目標を達成すべく、まず留学先の大学キャンパス内で友達を探そうとしたが、冬休みともあり、同世代の学生と出会う機会はなかった。そこで、学んだ中国語を日々実践している買い物で接する店員さんに勇気を持って「我们交朋友好不好?」と話しかけたのがきっかけで初めて中国人の友達ができたのである。友達になってくれたのは、1人で薬局を任されていた広東省出身の蔡さんだった。私は毎日午前の授業が終わると午後は薬局へ通い、仕事の邪魔をしないように、蔡さんとお客さんとの会話を聞いたり、筆記を中心に学んだ中国語で自分のことやお互いの家族のことや日本と中国の文化について話した。あるとき、蔡さんはわざわざ麻辣燙を買ってきて、「私はよく食べるんだよ、食べてみな!」と食文化を教えてくれた。汗が止まらず、辛さに咳き込みながらも食べたのを今でも思い出す。そのお返しに私は、折り鶴を折って渡し、一緒に鶴を折っ

て友好を深めた。今でも忘れられないことは、留学最後の日に蔡さんは仕事を午後だけ休み、私を上海の観光地に連れて行ってくれたことである。その夜、私は大学の宿舎で、蔡さんの優しさに涙した。

中国語もろくにしゃべれない見知らぬ日本人留学生を温かく迎え、友達にもなってくれ、ましてや仕事を半日休んでまでも観光地に連れていってくれた蔡さんの優しさは一生忘れることができない。蔡さんとの出会いが、私の日中友好活動の根源となっている。

現在私は蔡さんと同じ社会人になり、人生の先輩であり、社会人としても先輩である蔡さんにしてもらった恩を返す意味もこめて、私は神奈川県日中友好協会青年学生部（チャイ華）に所属している。

チャイ華では、日中友好イベントの企画・運営を行い、神奈川県に留学や仕事で来日している中国人や中国に興味関心を持っている日本人に参加してもらい、日中の相互理解と日中友好を深める活動を行っている。

チャイ華に所属する大学生を中心にオンライン開催した「日中の大学生が見た東京オリンピック」では、溢れるフェイクニュースをどのように捉えたかやスポーツマンシップの素晴らしさを発表した。その後の交流会で参加した日本人・中国人の青年が和気あいあいと日本と中国を理解しているのをみると、上海留学で自分が経験したことを思い出した。もっと多くの日本人にステレオタイプな見方を一度外し、色々な形で日中友好について知ってもらい、考えてもらいたいと強く感じた。

私にとって中国とは、蔡さんという1人の人間である。人口十四億の多民族国家であり、広大な国土を擁し、世界の政治、経済を動かす主要国である中国の全体像をとらえるのは大変難しいことだが、1人の人間（中国人・日本人）との交流から中国・日本を理解することが大切だと実感している。



2004年生まれ。愛知県豊橋市にある私立桜丘高校に在学中。現在現在高校2年生。幼少期に父の仕事の関係で一家で中国に渡り7年間過ごした。現地の私立学校に通い、中国人の子どものように教育を受けた経験は今でも鮮明に記憶に残っており、将来中国語を活かした職業に就き活躍したいという夢の原動力となっている。

清水 美空 (しみずみそら)

優秀賞

第二の故郷中国

私にとって中国は第二の故郷です。今でもふと中国で暮らしていたあの時のことを考えると温かい思いやりといつでも陽気な心で接してくれた現地の人・友達とまた一緒に生活したいと思うくらい私の中では人生の中で一番大切に思い出の場所です。

私は、父の仕事の関係で3歳から10歳までの約7年間を家族とともに中国の広東省、孫文の故郷である中山市というところで生活をしました。中山市には日本人学校・インターナショナルスクールはなく、広州の日本人学校に通うには片道2時間かかります。私は現地の私立学校に入学しました。両親とも日本人、当初は家族全員が全く中国語を話せないという状況、中山市内では両親とも日本人という家族は私たちだけでした。

日本語もほぼ通じない幼稚園への入学。最初は全く中国語がわからず、身振り手振りを頼りに周りの真似をしながら幼稚園で過ごしていましたが、そのうちクラスみんなが私を半分物珍しく、半分は中国の人の良いところである困っているから世話を焼くという優しさから身の回り、日々の過ごし方を教えてくれるようになりました。とりわけ仲良くなった友達とはいつも一緒に勉強や、仲良く遊んでとても楽しい思い出でいっぱい幼稚園生活でした。

その中でも特に私が印象に残っている出来事があります。それは、私が5歳の頃、一家で移住してきた別の日本人家族の2人姉妹が同じ幼稚園に入園をしてきた時のことです。

彼女たちが入園した初日、私は先生に呼ばれました。その際先生は「この子たちは中国語が聞き取れないからあなたが日本語で通訳してね」と言われました。

私は3歳から中国語を話すことが当たり前のこととして過ごしていたので突然「通訳してね」と言われてもどうやって日本語で伝えたらよいかわからず戸惑いました。例えば、私の中の解釈は「牛乳」は「ぎゅうにゅう」ではなく「ニューナイ」であり、それ以外頭に浮かんでこないのです。完全に母国語が中国語になっていたので通訳というのは大変難しいと感じることが多

かったです。

姉妹は都度私の精一杯の通訳を介して徐々に先生と話をすることができるようになり、中国語を話せるようになりました。

その後同系列の小学部に上がった私は、幼稚園のときよりさらに勉強が難しくなり毎回の厳しいテストをクリアするのに大変苦労しました。その反面、日本にはない楽しいイベント、ローラーブレードなど多彩なクラブ活動が多く毎日クラブ活動するのがとても楽しかったです。

ただし、日本人として受け止めなければならない現実も多々ありました。

学校では歴史問題については当然日本人としてはなく、中国の人としての観点から勉強をします。また、その都度日本に対する感情をぶつけられ傷ついたことも多々あります。

過去のこととはいえ、中国の人たちの癒えない傷や怒りが今なおあることも実感しました。

しかし、皆が同じような感情を抱いているのではなく、私を日本人・中国人関係なく真の友人として必死にかばってくれる友人も多くいたのも事実です。私は過去のことは決して消せないが、過去から学んだことを生かし私たちの世代から新たな友好関係を築くことは絶対に実現する。確信をしました。

日本に帰国してから約6年が経過しようとしています。現在は中国語を生かして中国経済・文化を学べる大学への進学を目指して日々中国語の勉強に励んでいます。

学校の帰り道、電車の中から外をふと見ると金色のきれいな夕日が見えることがあります。その夕日を見るたびに、中国の学校時代にスクールバスの中から見た夕日を思い出し、あの頃のきらきらした楽しい日々を思い出すと同時に、今度は中国と日本との懸け橋の役割を担い、そのためには何を自分すべきなのかを日々自問自答しています。

今の中国の状況を自分の目でしっかりと見つけ、その答えが見つかるまで交流を行っていきたいと思います。



外崎 万莉佳 (とのさき まりか)

入選

北海道室蘭市出身。中学1年時、友好姉妹都市である山東省日照市との交流をきっかけに日中友好の役に立つ人材になりたいと強く思うようになった。現在は、北海道登別明日中等教育学校で教諭として勤務している。未来を担う子どもたちに国際交流の大切さを伝え続けていきたい。

私から後輩へ繋ぐバトン

「中国の人って、私たち日本人のこと嫌いなんでしょ？」

13歳だった私はそう思っていた。しかし、その考えが180度変わる出来事があった。

中学一年生の夏、私と中国との出会いである。学校で担任の先生から一枚のプリントが配られた。それは、地元室蘭市の友好姉妹都市である「中国への中学生海外派遣交流団参加募集」のお知らせだった。「外国に行ってみよう」と、日頃から漠然と考えていた私は「応募したい」と好奇心が高まる一方、「でも中国か。中国人は日本のことよく思っていないし、怖いな」と悩んでいた。学校から帰宅し、母に応募のことを相談すると、とても驚き、「えっ、中国？」と困った様子。しかし、翌日になると母から「良いことも悪いことも経験は貴重な財産になるし、自分の力になるから挑戦してみるのもいいね」と、逆に背中を押してくれたのだ。

選考の結果、私は、中国山東省日照市に中学生海外派遣交流団の一員として参加できることになった。私と母の中国への印象は、出発前にすでに変わる事となった。訪中前日の出発式にわざわざ日照市から于建成市長が来てくださり、次のような温かいメッセージを下された。「皆さんは、お子さんを中国に來させることは、とても心配かもしれませんが、しかし、私は今回の子供たちの交流を通して、日中の友好を深めたいと思っています。あなた達のお子さんを我が子のように大切にさせていただくので安心して送り出して下さい」と。その時私は、市長の言葉にとっても安心し、また嬉しい気持ちになったことを今でも覚えている。

そのお言葉の通り、中国に行くところに行っても誰もが「熱烈歓迎」して下さり、限られた時間の中で本当に温かい心で接して下さった。お別れするときは、長年の親友と離れるかのように次から次へと涙が流れ出てきて、しばらくはその涙を止めることができなかった。「一期一会」の出会いの大切さを身をもって知ったのだ。

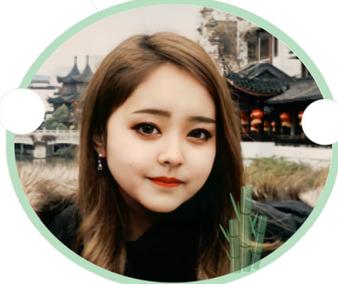
「中国の人って、私たち日本人のこと嫌いなんでしょ？」

という私の考えは、中国の人々に対する誤った考えだった。テレビや新聞などの報道から中国という国に対して自分勝手な印象を作り上げていたのだ。人は、他人の評価や噂から、初めて会う人に先入観をもって接してしまうことが多々あると思う。しかし、実際には自分で会ってその人に接してみなければその人のことを本当にはわからない。この経験から、先入観を捨て、自分の目で物事を見極める大切さを学んだのである。

日照市から戻った時、私の心には「これで終わりにしたくない」という強い思いが渦巻いた。自分だけではなく、後輩たちにも国際交流の素晴らしさ、大切さを伝えたい。中学生だった私は、まず中国語を学ぶところから始めた。高校、大学では、外国語の選択科目で中国語を学ぶ機会に恵まれた。卒業後、私は中学校教員となり、中国語教員の免許も取得した。

私の名前前の「万莉佳」の「万」は、両親が万里の長城のような長い道りを諦めないで歩いて行って欲しいという願いを込めてつけられたものだ。もしかすると私と中国との友好の歴史は、誕生した時から始まっていたのかもしれない。そして、両親の願いのとおり、私は日中友好の長い道りへのスタートラインに立ち、今その歩みを続けている。中国との出会いが私の人生を決定付けてくれた。

私の力は、小さな力かもしれない。それでも私は、隣国中国・日照市との交流から開いた民間レベルの日中友好を後輩に語り継ぎたい。今は、新型コロナウイルスの流行で国際交流も難しい状況にあるが、また往来できる日が訪れた時には、今度は私が生徒を中国に引率し、一人、また一人と日中友好の懸け橋となる民間人を増やしてバトンを繋いでいきたい。それが13歳の時に日照市の市長を始め、ホストファミリー、一佳中学校の皆さんと今も私の心が繋がっている証であり、恩返しの気持ちだ。2022年は日中国交正常化50周年を迎える。私の恩返しの長い道りはまだまだ続く。



カンタベリー大学中国語学部在学中。幼少期に母が購入したチャイナドレスを着たことが中国文化への関心が高まったはじめての一步だ。特に中国語に興味を持ったのは中国語のもつ音の響きだ。英語とは違う独特な音の響きに関心を持った。中国語の教授から中国語の発音を評価されたことが今でも中国語の学習の原動力となっている。

徳永 愛子(とくなが あいこ)

入選

80年前のありがとう

私と中国はきっと私が生まれる前から繋がっていた。私の祖父、山田嘉吉は私が生まれる前に亡くなっていた。当然私は彼の存在も彼が生前何を語ったかも知らない。私が中学に上がった時、母が私にこんな事を伝えてきた。「おじいちゃんは昔、戦争の時足を負傷して歩く事ができなかった時に敵の中国兵に助けられた事があったんだよ」。当時の私はそれが何を意味するのかわからなかった。

幼い頃から私は耳が良く、他の言語を音と捉えていた。そんな私にとって中国語はとても綺麗な音に聞こえた。日本語や英語にはない発音が素晴らしく感動した。家にあったチャイナドレスを着てテレビでよく放送されている中国語講座を真似て発音してみたこともあった。高校に上がり、遠く離れたニュージーランドに留学した。そこで私は中国人の彼と出会った。彼は私にいろいろなことを教えてくれた。彼と出会い、中国の文化や食べ物、日本と違う部分を沢山見つけた。私の母は私が中国の人と付き合う事をよく思っていなかった。日本人の中国に対するイメージが悪かった事が理由だった。

2019年の冬、彼の両親に会いに中国へ行った。上海へ行き成都へ行き発音の違いや食べ物、空気の匂いが違った。人の話し方や歩き方、コンビニの店員さんや道路に生えている雑草まで全てが違った。中国に滞在して2週間が経った頃、彼の祖母に会うため地下鉄に乗って南京へ向かっていた。しかし、母から「南京は危ないところだから、南京の人は日本人を恨んでいるから気をつけなさい。本当は行って欲しくない」と言われた事を思い出し、地下鉄のホームで子供のように泣き出してしまった。今から約80年前に起きた南京大虐殺のことだった。私は私が日本人である事を知られるのがとても怖かった。日本人である事が嫌になった。涙を拭いて勇気を振り絞り彼の祖母に会いに行くと彼女は私を強く抱きしめた。そして、「Welcome to

China! I am your grandma.」と言った。嬉しくてまた涙がこぼれ落ちた。中国語がわからない私のために英語を覚えて話しかけてくれた。

彼女は私に中国の名前をくれた「梦华」という名前だった。まるで中国に家族ができたようで嬉しかった。今まで独学で中国語を学んできた私は思うように話せなかった、だからこそ彼女ときちんと中国語で話しがしたいと強く思った。次は必ず彼女と話せるように、大学へ進学したいまもずっと中国語を勉強している。2020年になり、新型コロナウイルスが蔓延し中国へ行くことが出来なくなってしまったが、冬には日本のしめ縄と門松を中国に送った。中国の家族に日本の正月行事を伝えることができた。海を渡った隣の国だが、近いようで遠く感じる。言葉も文化も違う中国には日本を好きな人が多くいることも知った。私が南京で流した涙には様々な感情が込められていたと思う。今生きている時代の子供達は戦争を知らない。そして語り継がれることも少なくなるだろう。そんな時代に私は祖父を助けた中国兵の話をつつまでも後世に話し続けたい。私の知らない時代を生き抜いた祖父や祖父を助けた中国兵はこんな未来を想像したのだろうか？ もしも、あの時中国兵が私の祖父を助けていなかったら、私はここに存在しないのだろう。そしてきっと語り継がれることも無かったのだろう。中国と日本の橋を繋ぐそんなことが未来の私にできたなら、80年前の恩を返せるのだろうか。祖父から受け取ったメッセージを今なら理解する事ができる。いつの日か祖父に命を繋いでくれた事を形にして返したい。

初めは彼の事をよく思っていなかった母も言葉の壁を乗り越え「庆玮は私の息子だ」と言って喜んでいる。少しずつではあるが、まずは私の周りにいる多くの人達の考えを変える事が今の私にできる事なのかもしれない。

ありがとう。次は私が誰かを助ける番だ。



木田 結太郎(きだ ゆうたろう)

入選

2003年生まれ。東京都立西高等学校在学中。各国の文化を調べる中で、日本文化と中国文化の相違点に興味を持つ。また、以前から家族と中華料理を食べる機会が多くあり、中国の食文化に興味があった。このことが、中華料理と和食を文化的観点から比較した今回の作文を執筆するきっかけとなった。

大皿料理と日中の文化的相違点

近年、和食の一つとして認知されるラーメンは、その起源をたどると中国に行き着く。ラーメンは千年以上続く日本と中国の交流の中でもたらされた中華料理の一つであり、私はそうした中華料理がこの上なく好きである。中華料理固有の「大皿料理文化」に魅了されたのだ。大きな皿に盛られた同じ料理を皆が円卓を囲みながら食べる文化は、我々日本人が親しむ和食にはない。和食と中華料理には様々な特徴があるが、私はこの大皿料理文化が中国の文化を特徴づける重要なものであると気がついた。

日本では古くから各自がそれぞれのお膳で食事を取っていた。丁稚など家族以外の人と食事を共にすることが多かった当時、この形式は食事を共にする人との身分や地位の違いを明らかにする儒教的価値観の影響があったと思われる。例えば、主人の食事と他の人の食事の質に差をつけ、身分の差を明らかにしていた。明治時代以降、欧米文化や核家族化の煽りを受けてテーブルを囲む食事形式に変化してもなお、個々の皿で食事をとるという文化は根強く残っている。今日では一人で食事をとる「孤食」という形式も、一人世帯の増加などの影響で一般的になってきている。

一方で、中華料理では皆がテーブルを囲み、大皿料理を小皿に取り分けてシェアする形式が一般的だ。他の人と同じ皿の料理を食べるという発想は、平等性を感じさせ、身分制度による身分の差を強調する儒教的な価値観とは相容れない。しかしながら、儒教的な価値観は中国でも日本と同様に存在していただろう。では、なぜ中華料理では大皿料理の文化が維持されたのだろうか。

私はそこに、中国の「人とのつながりを大切にする価値観」が影響していると考え。中国では昔から、国土が広大であるために村や家族といった共同体が形成されやすく、人々の共同体意識も強かった。そうした人々の繋がり

が強い共同体では、比較的大きな身分差はなかったであろう。だからこそ、大皿料理など食事においても身分差を感じさせない文化が醸成されたと考えられる。やがて交通網が整備され人々の移動が活発になるにつれて「人とのつながりを大切にする価値観」が全国に広がっていき、同時に大皿料理の文化も広がっていった。食事の時に身分の違いを感じさせず、人とのつながりを大切にするという中国の価値観は、人間関係を通して深く何かを探究する風土につながり、歴史上優れた思想家や芸術家、学問を生み出したのかもしれない。

中国では現在、少子高齢化が急速に進んでいる。中国以上に少子高齢化が進んでいる日本を見ると、先に述べた「孤食」に代表されるように食事を通じた人とのつながりがますます薄れてきている。この日本の現状は、将来的に中国でも食事を通じたつながりの希薄化が進む可能性を示唆している。また近年では、一度に多く注文されることが多い大皿料理が食品ロスの原因になっているとして、大量注文を制限するようになってきた。食品ロスを削減することは大変素晴らしいことであるが、これも大皿料理を通じた人とのつながりに与える影響は大きいだろう。

誰かと食事を共にするという事は、いつの時代においても「人とのつながり」を持つきっかけになると思う。言語や文化の違う人とならば尚更、普遍的な「食事」という行為を通して言葉の壁を超えて交流できる。誰かと同じ味を共有できる中華料理の大皿文化は、そのような交流を一層深めるだろう。もちろん、このコロナ下においては誰かと国籍を超えて食事を共にすることは難しい。だが近い将来、この困難を乗り越えた先に日中の若者が同じテーブルを囲み、共に中華料理を楽しみながら、互いの「つながり」を楽しめる日を心から期待している。



東京都出身。国立音楽大学音楽学部演奏学科卒業。日系企業勤務を経て、現在は中国国際航空に客室乗務員として勤務。北京で半年間暮らしたことが人生の中で1番成長できた濃い思い出。中国で良く買う物は、日本で手に入りづらい輸入品の歯磨き粉と中国茶。上海に住むことが永遠の夢。



齋藤 里紗(さいとうりさ)

入選

泣き虫な私と中国人の愛情

6年前のある日、ふと思立って中国語を習い始めた。よくあるオンライン英会話の中国語版だ。もともと上海の都会的な雰囲気懂得ており、中国語を話せるようになって現地で暮らしてみたいと密かに妄想していた。

オンラインで私に中国語を教えてくれたのは、大連在住の大学生の女の子だった。

大学で日本語を専攻している彼女は、日本語でピンインの発音を一生懸命教えてくれた。とても熱心に教えてくれるので、私はすっかり彼女を好きになり、仕事終わりの夜21時頃から、ほぼ毎日中国語の授業を受けていた。

ある時彼女が申し訳なさそうに言った、「今日はまだ時間がありますか？ 齋藤さんが発音を上手くできないのは私の日本語が下手なせいです。だから今日は出来るようになるまで一緒に練習をしたい」と。授業料はシステム上追加で払うことが不可能で、これは彼女も知っている。つまり彼女は自分の貴重な時間を私に使ってくれようというのだ。私はこの時、彼女の純粋な心に心を打たれた。授業時間を大幅に越えてから電話を切った後、自分よりいくつも年下の大学生から感じる思いやりと責任感に心から感動し、思わずすすり泣いてしまった。彼女は日々仕事や人間関係のストレスにさらされ戦闘モードだった私に、純粋に真面目に物事に取り組む大事な初心を思い出させてくれた。

この出来事があった、私はなにがなんでも中国語を上達させて中国に行きたいと思うようになった。だから益々力を入れて中国語を練習した。そして5カ月後、ちょうど良く上海の会社で働く事ができる求人を見つけたのだ。

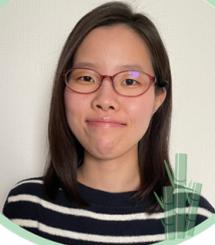
面接は英語で行われ、準備にかなり労力を費やしたがなんとか内々定を頂いた。そして会社を辞め、気付けば私は一緒に採用された同期と共に上海にいた。天にも登る気持ちだったが、それも束の間だった。現地で行われた健康診断で、私のお腹の中に嚢腫が発見されたのである。そして

私の採用は取り消され、わずか2週間で日本へ帰国した。初めは地獄のようだったし、もちろん泣いた。努力しても報われない、自分の力ではどうしようもないことがあるんだと、思い知った。しかし時間が経っても中国に対する気持ちが褪せることは無かった。そもそも上海の病院は、日本の健康診断では見つけられなかった嚢腫を見つけてくれたのだ。幸運だった。あの時のお医者さんは私の命の恩人だ。言葉の通じない私に丁寧に伝えてくれたことには心から感謝している。

そして今、私は中国の航空会社に客室乗務員として務めている。上海に住むという夢を叶えることはできなかったが、北京で半年間暮らすという貴重な経験をした。仕事を通して少なくとも5万人以上の中国人に会った。中国人と働く中で特に印象に残っているのは、彼らはとても合理的で無駄を省くのが得意ということだ。

そして自分の気持ちに正直で細かいことを気にしない。機内では時々大きく揺れるなどで飲み物をお客様にこぼしてしまうという場面が発生する。しかし大体の中国人は「いいよ、いいよ、大丈夫でしょ」と、ほとんど気にしない。頭から水を被ってしまった人があつげらんと許している場面を見たときは、本当に勉強させられた。自分もこのくらいおおらかに構えられる人間になりたいと思った。

もちろんすべての人が優しいわけではなかったが、とても厳しいリーダーに嫌われていると思っていたら、実は日本が大好きな人で、厳しいのは仕事を出来なければ私本人が困るだろうという愛情、責任感からだった、ということもあった。思えばこの時も感動して泣いた。私はいつだって中国人の愛情に泣かされているのだ。とても温かい人達だ。友達になった中国人の同僚はいつだって全力で助けてくれる。日本と中国の人がお互いの良いところを持ち寄り真摯に関わった時、私達のこれまでの価値観は大きく変わり、関係は現在より更に発展すると私は信じている。



久米村 花菜 (くめむら はな)

入選

2001年生まれ。千葉大学薬学部在籍。高校生の頃から中国医学に興味を持つが、日本で学べるとは限られているのである程度日本で勉強したら中国で学びたいと思い、大学から中国語を勉強し始める。大学では、東洋医学研究会というサークルに所属し、次年度にはその代表となる予定。

わたしの野望

皆さんには野望があるだろうか。

漢方と言うと多くの方は中国の薬というイメージを持つかもしれない。しかし、漢方とは日本の伝統医学のことを指し、漢方で使われる薬を漢方薬と言う。漢方は中国が漢と呼ばれていた時代に中国から日本に伝わった医学なのでそう呼ばれ、その後は日本で発展してきた。一方で中国の伝統医学は中医学と呼ばれ、その薬は中薬と言う。どちらも元々中国で生み出された医学なので似ているところは多いが、違うところも多々あるのだ。

将来研究者になりたいと考えるようになった私は、その研究対象として漠然と漢方薬を考えるようになった。けれども高校2年生のときにその思いを中薬に強く向けることになる出来事があった。高校の体験学習の一環で、将来になりたいと思っている職業の何人かにインタビューをすることになり、ペアになった友達が選んだ薬局の一つが中薬を扱う薬局だったのだ。そこでインタビューを受けてくださった店主は、生粋の日本人だが中国の大学で中薬を学び日本で薬局を開いた方で、中医学の考え方や処方の方など様々なことを教えてくれた。特に、中国の思想の一つである陰陽五行説がどんなに人や食べ物、季節など自然の全てに結びついていて、それが五臓にも結びついているために治るという話や、友達の舌や手を診るだけで彼女の慢性的な不調を的確に言い当て、食事や生活習慣のアドバイスまでしていたことは今でも忘れられない。スピリチュアルにすら思えるのに、実は何千年も前から莫大な経験と共に本当に人々を治し、その長きに渡る歴史までもが垣間見えて、店主が見せてくれたその中医学は魔法のようだった。私はそれまで中薬のことをほとんど知らず、漢方薬との違いも分からなかったのだが、そのお話を聞いて漢方薬よりも中薬とその理論となる中医学を勉強したいという気持ちが非常に高まった。

その後私は大学の薬学部に進学し、東洋医学研究会という主に漢方を学ぶサークルに入った。残念ながらコロナ下で大学2年生となった今でもサークル活動はオンライン上でのみだが、大学付属の漢方の研究所の先生方が講義を下さり、漢方メインではあるが中医学に通じるところも多く非常に有意義な学びになっている。また、いつか中国に行って本場の中薬を学びたいと思い、大学に入ってから中国語も勉強しだした。今年からは中国人の言語パートナーができ、話の中で毎回新しく文化の差を感じることもある。お隣の国なのにこうも違うものなのかと話を聞かされたらとても面白く感じるし、次はどんな違いを見つけられるだろうかとわくわくする。

日本では科学的な根拠が明らかでないという声から多くの漢方薬が保険適用外となっていて、まだ自国の伝統医学である漢方でさえ普及していない。昔と比べれば保険適用の漢方薬が増えて臨床で使われるようになったと言っても、漢方医学の考えを理解しないまま西洋医学の薬と同じように患者に漢方薬を処方してしまう医師が多い。漢方薬も中薬も、症状が同じでも患者一人一人の身体の状態が違えば処方異なるので、その場合正しい使い方とは言えないのだ。

漢方や中医学など東洋医学が得意とする病気の領域と西洋医学が得意とするものは異なる。そのため、どちらが良いというのではなくどちらも併用すればいいと思う。実際、中国では中医学は西洋医学と同じように身近で一般的であり、中医学と西洋医学のどちらもしっかりと学んでいる医師が数多くいる。近年では、欧米でも中医学がTCMの名で代替医療の一つとして受け入れられてきている。将来、日本でも中医学が受け入れられて西洋医学と併用され、西洋医学が苦手とする病気に苦しむ患者が大幅に減るように、私はその理論を解明したい。それが私の野望である。



1999年生まれ。兵庫県出身。京都大学法学部在学中。人生初の海外旅行が北京で中国に関心を抱くようになった。大学では法律を学ぶ傍ら、中国語や中国の政治・経済・文化など幅広く勉強している。今年、来年と留学が取消しになってしまったが、勉強を続け、将来は日中をつなぐ弁護士になることを志望している。



横尾 大貴(よこおたいき)

入選

世界はこんなに広い、行って見てみたい。

「世界那么大，我想去看看。」（「世界はこんなに広い、行って見てみたい。」）皆さんはこの有名な言葉を知っていますか。これは河南省のとある中学校教師が、退職をする時に、退職届に書いた10文字です。2015年に中国のネットで話題になり、「史上最もロマンチックな辞職届だ」と賞賛されました。私も、これまで2度この言葉のように感じたことがあります。ある一人の日本に住む中学生の少年は、何不自由なく生活を送っていました。よく勉学や部活に励み、順調に過ごしていました。ところが、夏休みのとある一日、突然目の前の人は何を言っているのかわからなくなってしまったのです。少年が「こんにちは」と言ってみると、返ってきた言葉は「你说什么?」でした。そうです、そこは少年が初めて海外を訪れた旅行先の中国・北京だったのです。人生で初めて、生まれ育った日本ではない、未知の世界に触れた瞬間でした。それまで少年の世界の中心は日本であり、世界の人々に日本語は通じるものだと漠然と思っていました。歴史の教科書で見たものよりもはるかに雄大な天安門の上から、天安門広場にいる幾千の中国の人々を見て、ここもまた世界の一部なのだと思います。それまで自分の考えていた世界が非常に小さかったことを実感しました。少年はとてつもなく大きい世界に大変驚き、こう思いました。「世界はこんなに広い、行って見てみたい」

その少年は、成長して大学生になりました。少年は、北京を訪れて以降、様々な国や地域を訪れました。そこで色々な経験をし、世界にいろんな国や地域が有ることを知りました。それまでの常識が何度も何度も覆されました。例えば、汗のしたたる夏の暑い日に、中国のレストランで出された飲み物はまさかの熱いお茶でした。「こんな暑い日に熱いお茶を出すなんてひどいではないか、非常識だ」

と思ったのもつかの間、中国の食文化では冷たいものは体を冷やすものとして嫌われているということを知って、これが中国の常識であって相手を嫌な気持ちにさせないための親切心でもあるのだと実感しました。そのようなかけがえのない経験を積んでいるさなか、世界を震撼させるウイルスが全世界に拡大しました。このウイルスにより多くの人が悲しい思いをしました。少年にもその巨大な波が押し寄せてきました。少年は留学を断念し、姉夫婦の結婚式も延期になりました。また、少年の最愛の彼女もこの病気からは逃れられませんでした。少年はひどく落ち込んでいました。おそらく世界の多くの人が同じように肩を落とし、涙を流したでしょう。しかし、少年は同時に奇跡も目にしました。仲が悪いのではないかと疑っていた日中両国の国民達がお互いを応援し合っていたのです。日本から中国に送られた支援物資に「山川異域 風月同天」の言葉が書かれていたのを目にし、少年は感動を覚えました。この閉ざされた状況下でも世界は繋がっていたのです。そこには国をも超えた人々の熱い想いが果てしなく広がっていました。この世界の人々の様々な想いを見て、少年は再び思いました。「世界はこんなに広い、行って見てみたい」

その少年こそ、この文章を書いた私です。初めて北京に行ったときから現在に至るまで、世界そして中国に対する希望と熱意を持ち続けています。そして、その原点である中国は私の人生をより豊かにしました。天安門でのあの感動こそが、私と中国との始まりでした。中国人と挨拶すら出来なかったあの少年が中国の言葉や文化を学び、たくさんの中国人の友達を作りました。まだ私の知る世界そして中国はまだまだ小さいのかもしれませんが。だから私は現在の厳しい状況のなかで声を大にして言いたいのです。「世界、そして中国はこんなに広い、私は行って見てみたい」



近藤 栞(こんどう しおり)

入選

2002年生まれ。大学では新しいことをやってみようと中国語を学び始める。麻婆豆腐やエビチリなどの中華料理、チャイボーグメイクや漢服が好き。くるりの「琥珀色の街、上海蟹の朝」という曲がとても好きで、まだ食べたことのない上海蟹に強い憧れを持つ。最近は、日本と中国の文化の違いにも関心がある。

中国語から「中国」に迫る

「英語から少し離れたい」そんな消極的な理由から、私の中国語学習は始まった。私が通う大学では、卒業に必要な言語の8単位を、英語でとるか中国語でとるか選択できる。

多くの人が慣れ親しんだ英語を選択する中で、私は迷っていた。中高合わせて6年も英語を勉強しているのに、なかなか上達しない。こんな調子では、何年やっても変わらないのではないか。焦りと自己嫌悪が、唯一持っていた英語が好きだという気持ちまでも揺さぶっていた。この気持ちがなくなったら終わりだ、いったん距離を置こう。散々迷った結果、いちど中国語の世界に飛び込んでみることに決めた。

消去法で中国語の履修を決めたが、もともと中国への関心はもっていた。きっかけとなったのは、新型コロナウイルスだ。ロックダウンされた武漢の夜、住民たちが窓から互いを激励している光景が報道されていたことが、とても印象に残っている。

人とのつながりを重んじ、つらいときこそ団結しようとする姿勢に、人間的なあたたかさを感じた。同じような状況になっても、日本では決して起こらないような出来事だ。漢字を使う文化圏で、顔もよく似ているのに、日本とは大きく異なる文化も併せ持っている中国に興味があった。

思い切って履修した中国語の講義は、そんな私の好奇心を満たしてくれるものだった。特に心に残ったのが、日本人ドキュメンタリー監督の竹内亮が、都市封鎖が解除された武漢で市民に密着した動画や、タオバオという中国最大のネットショッピングサイトに来店する若手クリエイターに密着し

た動画を見て、中国語で簡単なディスカッションを行ったことだ。笑いあり涙ありの人間味あふれる武漢の人たちの姿に感動したり、好きという気持ちをエネルギーに自分のやりたいことに挑戦している若者たちの姿に刺激を受けた。

慣れない中国語を実践形式で使うのは難しかったが、中国語をツールに文化への理解を深めるのはとても身になる学びだった。

また、実際に発音していく中で、一文字ごとにアクセントが変化する、という言語的な特徴が、中国語が怒っているように聞こえがちなことに影響しているということも、身をもって感じられた。中国語を通して、中国の新しい側面をいくつも知ることが出来たのだ。

しかし、中国語を始めてから、ふと疑問に思うことがあった。私はなぜ、巨大な隣国のことをこんなにも知らないでいたのだろうか。英語のスランプやコロナなどのきっかけがなかったら、私は中国に無関心なままだった可能性が高い。もしかしたら、中国に対して持っていたマイナスイメージが、無意識に興味を邪魔していたのかもしれない。

日本には、いまだに中国に対する根深い偏見がある。私もまだ、どこまでが偏見で、どこからが本当の中国なのかわからない。でも、大切なのは、物事の光だけ、闇だけを見るのではなく、バランスよく知ろうとすることだ。私はまだまだ中国に関する知識が少ないけれど、相当な奥深さを持った国であることは感じている。新しい中国を発見していくことで、中国に関する情報を多角的に分析し、中国の本当の姿に迫りたい。中国語を通して、中国まるごとを学んでいきたいのだ。



京都大学大学院文学研究科修士2年。20世紀60年代の日仏映画について修士論文を準備しています。2年前から考えていた中国行きがなかなか叶わず、このまま学生生活が終わってしまいそうで非常に残念ですが、人生のどこかのタイミングで、仕事でも留学でも、中国に滞在する機会が訪れることを強く願っています。



嵐 大樹(あらし ひろき)

入選

出会い損ねの中国

私と中国の関係は、率直に言って「出会い損ね」の連続であった。

中国という存在にきちんと興味を持ち始めたのは、大学4年生の時の欧州留学である。元々理系だった私は、次第に国内外の芸術文化に強く惹かれてフランス文学科へ文転し、ついで映画を学ぶために欧州へ留学した。それまで、アメリカ旅行のためのトランジットで北京に2日間滞在した他に私と中国との関わりはほぼなく、主な関心はずっと欧米に集中していた。しかしその転機となったのが、まさにその欧州への長期滞在であった。

海外留学を機に、ルーツであるところの母国の歴史文化に改めて関心が向かうというのはよくある話である。私もまた例に漏れずその通りとなった。しかし私の場合それだけでなく、欧州という想像の共同体の強固さを現地でも身をもって体感したことで、翻ってアジアという存在に本格的に関心を持ち始めていた。夏季休暇中に実家のある奈良で過ごしていたこともあり、古代の歴史を日々感じながらアジアの中の日本ということを考えているうちに、必然的に中国という大きな存在に行き当たることになった。いうまでもなく、近代以前の日本文化の大半は中国由来であるからである。

そんな中、たまたま唐招提寺を散歩していると、ある中国から来た老人と出会った。彼は、かつて仏教を通して日中友好に携わっていた団体関係者の親戚であり、その石碑に刻まれた親族の名前を見にわざわざ奈良を訪れたのだという。私はその時、日中文化の連綿と続く結びつきのほんの一端に触れた気がし、深い感銘を受けた。しかし同時に、相手は日本語を、私は中国語を話せないこともあって十分なコミュニケーションを取ることはできず、歯痒い思いをした。

そうして私は中国語の学習を開始し、卒業論文では辛亥革命期の中国に滞在したフランス人作家のヴィクトール・セガレンを扱うことに決めた。それは欧米、特に欧州に集中していた、進学当時の私の関心からは考えられない選択だった。つ

いで、大学院の進学先もそのようなアジアとヨーロッパの文化的交流を扱うことのできる場所を選択し、まずは現地に触れようと進学直前には1か月間の中国滞在中も計画した。

しかし突然、新型コロナウイルス感染症が発生・拡大し、私の中国行きは宙吊りとなった。加えて、中国への渡航可能性の不確定さもあって、修士論文のテーマは日本とフランスの映画的交流へと変更された。欧州留学という意義ある遠回りを経てついに辿り着いたと思われた中国と、私はまたしても出会い損ねたのである。

私は来年から、日中交流も含む国際文化交流を担う機関で働くことが決まっている。

振り返ってみれば、これまで述べてきたような私と中国の出会い損ねの連続は、新型コロナウイルスという突発的な出来事は別として、おそらく単に私の個人的な事象ではなく、実はより深い構造的な問題であると思う。大学をはじめとした日本の知の世界は依然としてヨーロッパ中心主義的であり、また、英米中心主義の学校教育や日々の報道を通して中国に特別な興味を持つきっかけはあまりない。あるいはあるとしても、その多くは残念ながらネガティブなものに偏ったものであろう。欧米より文化的にも空間的にもはるかに近いにもかかわらず、である。しかし現在のように悪化した日中関係は、日本の植民地主義時代を含めせいぜい近代以降であり、むしろ歴史的に見て異常であるときえ言える。

もちろんその変革のために、私1人にできることは非常に限られている。しかし仕事の中で日中友好に資する文化交流の機会をこれからの若い世代に提供していくことは、将来的に彼ら彼女らが構造的な問題を変えようと行動することに確実につながっている。それはこれまで千年以上もかけて積み重ねられてきた日中関係を思えば、極めてやりがいあることであろう。このような信念を胸に、私は今後生涯を通して日中文化の「出会い直し」に貢献していく所存である。



宮坂 宗治郎 (みやさか しゅうじろう)

入選

神奈川県日中友好協会青年学生部会チャイ華所属。大学生時代に第二外国語として、中国語を学習。北京大学での短期留学中、多くの中国人に助けられ、帰国後は中国人のために活動したいと思い、ボランティア団体のチャイ華に加入。現在は、日中交流イベントの企画、運営を行っている。

日本から繋ぐ中国

「コロナ」、この単語を聴かない日はなくなりました。日々のニュースで見ない日はありません。世界中の人がマスクを付けるようになり、まるで世界が変わりました。そして、各国が他の国に行くことさえ容易ではなくなってしまいました。それにより国際交流は激減。日中交流も例外ではありませんでした。

私は日本で日中友好のボランティア団体のスタッフをしています。ボランティアではお花見、餃子を作りながらの料理交流などの企画、運営を行っています。しかし、昨年度よりコロナが流行り始めると、瞬く間に企画していたイベントはすべて中止となりました。日中交流の場はコロナにより奪われてしまったのです。もちろんイベントを開催できるのであれば、開催したい。でも、コロナが落ち着くまでは「我慢」、そう思いながらスタッフ全員ですべてのイベントを見送ってきました。

しかし、見送り続けてどれだけの日々が過ぎただろうと思うようになった頃、ボランティア団体のスタッフがオンラインイベントの企画を提案するようになりました。とは言え、その提案を知っても、私はオンラインで本当の交流などできず、中途半端になると半信半疑に思っていたのです。

しかしながら、今の若い人は昔に比べ、オンラインの利用頻度が高いこと、世の中がテレワークなどの急速な普及により、オンラインに抵抗がなくなってきたことを少しずつ実感するようになってきました。

そんな時、ボランティアスタッフの一人が東京オリンピックをテーマに、日中双方の学生がどのようにオリンピックを感じたかを発表するイベントの企画を提案したのです。私はスタッフを受けることにしました。初めてのオンラインイベントスタッフです。一年延期、無観客など異例の東京オリンピックを今の若い学生がどう感じたかを聴いてみたいという興味もあったのです。

そして、このオンラインイベントを実際に行い、日本と中国の学生それぞれ二名ずつに発表してもらいました。

驚きました。中国の学生も日本の学生も写真、動画などを利用してパワーポイントにまとめていたのですが、画面共有することにより参加者全員が目前で見る事ができるのです。これは見やすいと感じました。それだけではありません。中国の学生が発表というのは在日中国人学生の発表と思っていたのですが、中国の大学からオンラインで参加して、発表してくれたのです。今まで企画したイベントは直接会って、対面で交流するイベントばかりでしたが、それはつまり、日本にいる人しか参加できないというデメリットでもあったのだと痛感させられたのです。日中交流と言いながら、ボランティアの対象にしていたのは日本にいる中国人に絞られていた、そう感じたと同時に世界の広げ方を知れたように思いました。

また、それぞれの学生が発表してくれた内容にも、とても感心させられました。メディアなどと同じようなことを言うのではなく、それぞれがしっかりと自分の意見を持ち、しっかりと語ってくれました。多くの大人を前に、自分の意見を語ることは容易ではなかったはずです。

イベント終了後に思ったのは、コロナなんかのために、若い人たちの交流が妨げられてはいけないということでした。そして、オンラインを利用すればコロナに影響は受けない、それどころか中国からも参加できる。これは、モチベーションの下がったボランティア魂に、もう一度火がつかしました。

私はこれからもボランティア団体の仲間たちと日中交流のイベントを企画、運営し続けます。そして、今はオンラインも利用して日本と中国にいる若い人の交流を支援していきたいと思います。いつかその若い人たちが対面でも交流できる日を待ち望んで。



慶應義塾大学文学部人文社会学科社会学専攻に在学中。第二外国語として中国語を履修し、語学だけでなく、中国の歴史や文化、日本との関わりについて興味を持つ。2年前の日中学生交流会で知り合った中国人学生と、頻りに連絡を取り合い、互いの言語を教え合ったり近況報告をしたりしている。



清水 若葉(しみずわかば)

入選

水魚の交わり

「奥に引っ込め、日本人に代われと怒鳴られました。私の名札を見た途端 悲しげな表情を浮かべそう話していたのは、中国人留学生の王吟菲さんだ。これは、彼女が日本のコンビニエンスストアでアルバイトをしていた際、客の男性にかけられた言葉である。ただ、いつも通り接客をしていただけなのに。

この差別と捉えられるような行為は、異文化への理解不足や自文化への行き過ぎた誇りによるものだと言える。日本と中国には、多種多様な人々が暮らしている。同じ人など一人もいない。ただ「違い」があるだけなのに、国と国との間で優劣の差をつけてしまう。

「孤之有孔明 猶魚之有水也」。この漢文は、三国時代に劉備が三顧の礼で迎えた諸葛孔明との親密な交友関係を表している。「水魚の交わり」ということわざの元になった漢文であり、なくてはならない関係を表す語句となっている。空海や阿倍仲麻呂がかつて遣唐使として派遣された場所。中国の律令をお手本として制定された大宝律令。私の祖父が住む京都の基盤の目に似た町造りは、当時の中国の街並みから来ている。古くから日本と中国は切っても切れない関係だ。現在もグローバル化が進む中で、隣国の中国との関係は切り離すことができない。しかし、周囲には嫌悪感を抱いている人が少なからずいるように感じる。

魚と水の関係のように、日本と中国が親密な関係になるために必要なこと。それは、目の前にいる相手に対して、親しみを持つて接することだろう。以前中国を訪れた際、このことを痛感した。

中国で電車に乗っていたところ、同じ車両に乗り合わせた中国人の子供たちが「日本から来たの?」と話しかけてくれた。日本から観光に来ていると答えると、中国には地域によって異なった食文化があること、グローバル化が進んでおり学校では英語教育に力が入れていることなど、私の知らないことをたくさん教えてくれた。そして、日本はどんなところなのか、目を輝かせながら聞いてきてくれた。電車から降りる前に仲良くなった子供たちがくれたプレゼントのキーホルダーは、今でも大切な宝物だ。中国の方が親しみを持って話しかけてくれたからこそ、築くことのできた関係。自分の目で見て、心で感じ、自分が知らなかったことの良さを理解することは、異文化理解の第一歩になるということ、身をもって感じる事ができた。

これからの未来を担うのは、私たちの若い世代である。若い世代のエネルギーは、歴史認識を乗り越え、相互理解と相互信頼に基づく新たな日中関係を切り拓くことができると考える。優劣のない対等な関係の中で「違い」を認め合える社会。これが私の求める未来だ。

私は、来年からジャーナリストとして働くことを決めた。現在、新型コロナウイルスの影響で、実際に現地を訪れ直接交流することは以前より難しくなっている。だからこそ、私の知っている中国の温かさを伝えると共に、差別で苦しむ人の声を届けることで、本当に偏見の目を持っていないか自らを問いただすきっかけを作りたい。王吟菲さんのように偏見で苦しむ人が増えぬよう、私は社会にはたらきかけたい。

中華人民共和国大使館

〒106-0046 東京都港区元麻布3-4-33

HP: www.china-embassy.or.jp/jpn/

E-Mail: kohobu@china-embassy.or.jp (本誌へのご意見・ご感想は、こちらまでお寄せください)

交通案内: 東京メトロ日比谷線の六本木駅で下車、テレビ朝日通りを南へ徒歩約10分



中国大使館HP(左)とTwitter(右)

制作協力: 中国外文局アジア太平洋広報センター(人民中国雑誌社、中国報道雑誌社)

HP: <http://www.peopleschina.com/>

Twitter: @peoplechina



『人民中国』HP(左)とTwitter(右)